

今号の TOPICS ～2年間を振り返って～

*****目次*****

- P1 今号の TOPICS 溝部 浩二
 P2 仲間たちの近況報告 (1)
 1 班 阪上 正方
 2 班 坪井 都子
 P3 仲間たちの近況報告 (2)
 3 班 宮阪 信次
 4 班 渡辺 文子
 P4 新専任幹事 根崎 明義
 リレー随筆 和田 光子
 P5 私の玉手箱 木村 忠司
 P6 樹形ウォッチング 遊上 真一
 P7 写真コーナー 大森 美子
 絵手紙コーナー 高原 富佐子
 P8 絵画コーナー 猪狩 美枝子
 俳句・川柳 谷坂 修二

◇自然と文化だより◇

今期の最終号となりました。

皆様のご協力で、今号も文章・絵・写真等たくさんいただきました。

今号には今期で退会（休会）される方も多く執筆されています。いずれも幅広く活躍されており、去られるのは惜しい方ばかりです。機会があれば、是非、また戻っていただきたいと思います。

N.A



今後に向けて

代表 溝部 浩二

この3月末で2年間の代表を無事に終えることができました。これまで何とかやって来られたのもひとえに皆さまのご支援・ご協力のたまものと、心から感謝申し上げます。

今年度は科を挙げて中期ビジョンの検討を行いました。問題意識としては、6、7年程前に体制検討委員会を作って同様の検討をしましたが、その後入科した人達で科員の半分を超えるまでになったことや、近年大学校へ入って来る人達の意識も変化しており、世代間の考え方に差が生じていないか一度擦り合わせを行って当科の今後の目指すべき方向付けをはっきりさせたいという思いがあったからでした。検討会議のメンバーはじめ多くの科員の参加を得て活発な議論を行った結果、次の3つの方向性が確認されました。

「調査・研究活動を充実」し、「学び・研鑽の場」であることを意識して「社会との連携を深める」ことであります。

調査・研究活動の充実については、今の体制のままでも調査委員会の中に現状の草本以外に、例えば木本や歴史文化関係などの調査チームを作って定点観察や実証的な調査活動を行うことは可能であると思います。

また、自己研鑽の向上については、当科の活動の大きな柱である公開講演会について、講師・内容を多様性に富んだより有意義なものにしていくとともに、年2回実施している科内発表会をさらに充実する必要があります。

社会貢献活動は今年度から小学校の出前学習会を新たに始めましたが、今後は大阪ガスの受託事業である「シニア向け」、出前学習会の「小学生向け」のほかに「ファミリー向け」を加えるなど、幅を広げていくことも考えられます。なお、小学校出前学習会については、来年度から大学校としてシボルの活動にしようと制度づくりを始めることになっていきます。

最後に、こうしたビジョン実現に向けた活動の前提となる

最も大切なことは、「参加して楽しい」ということです。特にシニア世代にとって「楽しむ」ということが長続きする活動の原点だと思います。私も当科の活動を楽しみながらこれからも続けていきたいと思っています。



「進路ガイダンス」にて

淀川遡上徒歩の旅

1班 阪上 正方

私は時々、長距離ウォークに出かけることがある。歩行距離は一日約 20 キロで、原則は日帰り、天気の良い日は避ける。無理せずゆっくり楽しむ。これまでに大阪湾から若狭湾までの本州横断、京都から岡山までの西国街道踏破、琵琶湖周回などをやってきた。

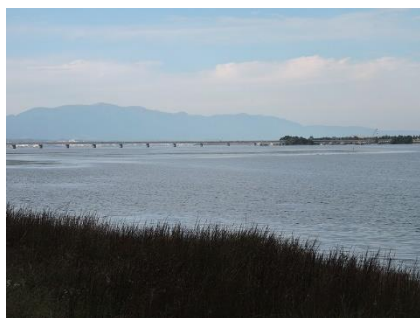
一昨年 10 月、淀川河口から琵琶湖まで歩いてみようと思い立った。必ずしも川沿いの道にこだわらず川を離れての近道もありという、自分なりの軟弱なルールをつくってスタートした。

第一日は此花区の舞洲から出発。淀川左岸の堤防上を上流へ向かう。遠くに六甲の山並みが見える。やがて梅田や十三の市街地を間近に見ながら進み、毛間の閘門を越えてから河川敷を歩く。次第に足に疲れを感じ始め、この日は鳥飼大橋で右折して、守口市の大日駅で歩行終了とした。

第二日は大日駅を出発し、淀川左岸の河川敷を再び上流へ。単調な道が延々と続き面白くなく、日陰もない。枚方を過ぎると林が多くなって日陰もあるようになった。樟葉で河川敷の道は終わりで京阪電車沿いに八幡市駅まで歩いた。

第三日は八幡市駅を出発。三川合流地点の少し上流から宇治川左岸を歩く。難読地名の東一口(ひがしいもあらい)を過ぎ、伏見の観月橋も過ぎて、宇治市の隠元橋から川を離れて黄檗山萬福寺へ。寺をゆっくり見学する。ここから琵琶湖まで山越えの近道をすることにして、この日は北に向かって醍醐駅まで歩いた。

第四日は醍醐寺から山道を登って横嶺峠を越え、宇治市の山間、笠取地区に下る。さらに峠を二つ越えて大津市へ入り、石山寺のところで淀川上流の瀬田川に出る。石山寺を見学して気分を転換。「瀬田の唐橋」を過ぎ、川幅は広がって琵琶湖となる。石山駅に戻って歩行終了。全行程は約 85 キロだった。



オーロラを見たい！

2班 坪井 都子

4 年前、某サークルで「オーロラ」がテーマの輪読会がありました。これがきっかけで本物のオーロラをこの目で見たいと 2 年前フィンランドに行きました(残念)。2 度目、見られる確率と見られなかった時の残された楽しみを豊かにする候補地を選び抜きました。「火と氷の国・アイスランド」に決定。今年の 2/8~14 行ってきました。

〔オーロラとは?〕

ローマ神話に登場する暁の女神「アウラ(Aura)」が語源。欧米では一般的に Northern lights(北極光)」と呼ば



れています。オーロラとは太陽から放出されるプラズマの流れ(太陽風)が地球の極地の超高層大気圏に突入し、そこにある原子・分子に衝突して引き起こされる光の舞のこと。オーロラが発生するということは、この地球という惑星の生命を守るための大事なバリアである「大気」と「磁場」が存在するということ。つまりオーロラは生命が地球に存在できる証明なのです。オーロラ帯は地磁気緯度で 65~70 度の地域であり、極を取り巻くベルト状になっています。そこでカナダやフィンランドやアイスランド等が候補地になってきます。

さて、アイスランドは北海道よりやや広い位の 10.3 万 km²、人口約 33 万人の国。200 以上の火山と国土の 12% を占める氷河、フィヨルドに囲まれた島です。シベリア、樺太よりずっと北に位置するのに札幌なみの暖かさです。それは暖かいメキシコ湾流の影響とか。ちなみに 2 月の日の出は 10:08 日の入りは 17:15、朝 9 時でも薄暗かったです。北米プレートとユーラシアプレートが引き合って島の中央に地球の割れ目「ギャウ」が走っています。そして火山国たる象徴の「間欠泉」、目の前で 5 分間隔で 30m の豪快な熱湯が吹き上がり、ど迫力！ 自然の力を大いに利用した世界最大級の露天温泉が「ブルーラグーン」。水着を着て白い泥状のシリカで泥パックもしました。たった 2 時間、もっともっと楽しめたかったです。ちなみにオーロラは？ はい、写真のような最上級のものではないけれど見ることができました。

オーロラ旅行は体力的にきついけれど、機会があれば懲りずに又行きたいものです。

歴史の小道——ルイスフロイトに学ぶ

3 班 宮阪 信次

2014 年の NHK 大河ドラマ「黒田官兵衛」は、天才軍師として、戦国の乱世を見事に生き抜き、九州福岡藩 52 万石の礎を築いた官兵衛の生涯が描かれている。官兵衛の史実として、伊丹駅前にある有岡城の牢に 1 年以上も幽閉され、窓から見える藤の花を眺めて、「藤よ、藤よ、花をつけよ」と願う姿が、司馬遼太郎著『播磨灘物語』に描かれている。官兵衛はその命を保ち、廃人寸前の身体で牢から助け出され、九死に一生を得て、以後活躍した。「完訳フロイトの日本史」は、世界で日本でしか現代語訳されていない、西洋人による初の「日本史」といえる。戦国時代の英雄たちの姿が生き生きと描かれている。黒田官兵衛についても、一例として「1588 年 2 月 20 日付のルイス・フロイトの年報に、「黒田官兵衛殿」と記されていて、官兵衛の読みは「かんべえ」ではなく、「かんびょうえ」であったと考えることもできる。官兵衛がキリシタン大名で、布教活動の史実が多く記されている。歴史学の専門家たちは著者が宣教師なので歴史書としての価値は低いと、評価している。が、私の好きな戦国時代の歴史書なので、私は今後も継続して大部なこの歴史書に取り組んでいきたい。

最後に、「藤」の花についての私の漢詩「暮春即時」を紹介する

(概要) 藤は春から夏への季節の移り替えを代表する花だといわれている。悠久の自然と人間社会の共生の難しさをどう生きていけばいいのだろう。

暮春即時

奥山 散策 緑林平
千紫 藤花 春正行
堰堤 廃墟 涙朽木
自然 人識 萬憂生



(参考文献)

『完訳フロイト日本史(11)』

黒田官兵衛の改宗と少年使節の帰国、ルイス・フロイト、中央文庫

誘惑と自制の間

4 班 渡辺 文子

1 月の公開講演会「セルフコントロール力の強さ」を判定するプリントをやってみて、思わずギャッと叫んでしまいました。

*誘惑によく負けてしまう…よく当てはまる (5 点)

*怠け者だ …よく当てはまる(5 点)

*身の回りが片付いていない…よく当てはまる (5 点)

*悪いとわかっていてもやめられないことがある …よく当てはまる(5 点)

シビアに採点すれば、70 点満点中の 70 点。少し甘めに採点しても 60 点くらい。点を引けるのは「もっと自己修養ができていたらなあと思う」という項目くらいだったりするので、救いようがありません。そういえば、学生時代に一番気が合った友人の「家訓」は

*なるようにしかならない

*明日できることは今日するな

*あとは野となれ山となれ

でした。これを加えると、70 点満点中 75 点!? 周りの人に聞いてみると、満点に近い人と 20 点台・30 点台と極端にわかれるようでした。

少しはセルフコントロール力を付けようと思って、紹介された本『いつも時間がないあなたに』を買いました。中身は期待とはちょっと違って、「有効な時間活用術」ではなく「欠乏の行動経済学」の入門書でした。“速読の講習を受けて、『戦争と平和』を 20 分で読んだ。ロシアに関する本だった”的に要約すると、次のようになりました。

欠乏が集中力を高める効果を「集中ボーナス」と呼び、欠乏のせいで重要なことがトンネルの外に押し出されてしまうマイナス効果を「トンネリング」と呼ぶ。2 つの効果の内、マイナスの効果の方が圧倒的に強い。欠乏は欠乏を生み、さらなる悪循環に陥る。欠乏状態に陥らないためのゆとり・遊び「スラック」が重要である。

「トンネリング」が引き起こす様々なマイナス効果が、これでもかというほど書かれているにもかかわらず「集中ボーナス」に頼ろうとする自分がいます。この悪循環から抜け出す道はないのでしょうか。できるだけ「スラック」を作りたいと思います。

広報活動の展開について

4班 根崎 明義

想定外の引き継ぎでしたので、新任専任幹事のご挨拶と正面から取り上げるのもどうかと思いましたが、無しで済ますわけにもいかず、経過と今後について書くことを書かせていただきます。

野村さんの退院を待っている中で、入院から短期間で亡くなられたので、引き継ぎを考えることもできませんでした。それでもその前1年間、野村さんの下で広報幹事をやらせていただいたのと、花ごよみ調査隊のホームページを作成する際に、自然と文化科のホームページデーターを野村さんより見せてもらっていた為、大きな混乱なく、代行することができたのではないかと思います。

今後の広報活動の展開についてですが、「自然と文化だより」につきましては原稿次第です。今期から1ページ半を班毎の持ち回りとして担当していただきました。ある程度は成功し、協力していただけたと思いますが、未だ十分とはいえません。普段の活動の中から、幅広く色々な人たちが紙面を埋めるようになるのが理想です。

例えば自然観察や歴史文化探索の活動の中から俳句や川柳が得られるならより多くの人に参加出来ますし、活動の楽しみが一つ増えます。俳句等に限定する必要はありません。例えば、植物の特徴を表現する短文を出していただき、植物カルタとしてまとめるとか、日常の活動中に撮影した写真のなかから本日のベスト写真あるいは私だけが見たこの光景とか、植物の特徴を明瞭に写した写真はカルタの絵札としても採用可能です。

これらのことを実現するためには収集方法と選別方法に工夫が必要です。収集は活動日にその場で記入していただくのが確実ですが、写真でもいいわけですし、俳句等なら少し考える時間があつた方がいいかもしれません。時間がとれば絵も可能です。そこでホームページを利用した投稿サイトの作成を考えています。

これも班ごとの持ち回りとし、担当月の活動の中で作成した作品を投稿してもらい、適当なものを選別して、「自然と文化だより」に掲載する形になります。

選別者は立候補していただくと良いのですが、幹事を卒業された方には人材豊富と思いますが如何でしょうか。

花山温泉

2班 和田 光子

2月の初めに近所の方と温泉に行ってきました。その方も温泉大好きでそこには何回か行ったことがありましたが、一度泊まってみたいと思われていたみたいで、私と同じ思いだったので2人で行ってみる事にしました。

そこは和歌山市内の花山温泉で炭酸濃度が約1700 ミリと大変高い冷泉で他に二酸化炭素・鉄・カルシウム・マグネシウム・塩化物を含んでいて、源泉掛け流しの温泉です。26度と41度のお湯を行ったり来たりして楽しめます。

なぜ泊まってみたかったかといえは、終了後、湯を捨て掃除して宿泊客に一番の温泉を提供してくれるということで、どの様な湯か想像をかき立てられたからでした。

朝6時に起きて入ってみました。特別変わったところはありませんでしたが、カルシウムの湯の花が薄っすらと表面に咲いていました。常連さんが結構いらして次回の宿泊を予約して帰られるとの事でした。

食事はスタンダードの事もありますが、可もなく不可もなく塩分控えめだったので私的には満足しました。

さて、次の日はどうしようかと思っていましたら、たまたまヨーガと整体が無料で受けられるとの事で、朝食後、花山温泉神社のお祭りに参拝してからチェックアウトをし、ヨーガに参加しました。毎水曜日に近所の方が来ていて10人ほどの会でした。ヨーガ療法というあまり聞きなれないヨガです。終了後、先生から話を聞かせていただきました。体幹をきたえるというよりは無理のないヨーガで、自分でも気づいていない心の奥の気持ちを引き出すのが目的で、心身症の方の治療に取り入れられているとの事でした。

ここの温泉の社長さんが整体をされているとのことで、午後からは1時間ほど身体の歪みを矯正していただき、ちょっとお得な健康温泉ツアーを満喫しました。



バカンス山岳部

2 班 木村 忠司

三畝峠に着いた。見上げると冬の青空をバックに真っ白に輝く霧氷が美しい。ここから山頂までは霧氷のトンネルを行く。雪は締まって歩きやすい。周りはシロヤシオの群生だ。雪の白さにシロヤシオの赤い冬芽も美しい。



予定時刻の 11 時 30 分、山頂に到着。「やったぞー！」と大声で叫んだ。「お父さんと来て良かった」。M 子がほっぺを赤くして寄ってきた。32 歳。若くて馬力があるのでいつも私のすぐ後ろにピタッとついて登ってくる。

「良かったす。雪があって。」いつも無口の Y 男も嬉しそう。入って 3 年目だが、昨年 O 子とゴールイン。今夏に早くも第一子が誕生予定だ。昨年 5 月、赤坂山で祝福したのが昨日のこのように思い出される。

「樹氷がきれい！」昨夜遅くまで主人の仕込みを手伝っていたという K 子は、感動の面持ちだ。そこへ最後に登頂した S が、「隊長、はよ昼飯にしようや」。彼は大学の友人で高齢者大学の山岳部にも入っていた山好きだ。去年は皆勤賞を受賞。

「おやじ、足は大丈夫か？」写真係をつとめる次男が、心配そうに声をかけてきた。私は昨年、この冬山登山のメッカ三峰山に登ってから、腰部脊柱管狭窄症になり、1 週間足が動かなかった。本当に無念だった。その私に代わって 3、4 月、隊長を務めてくれたのが彼だ。家ではあまり話さないが、山ではいろいろ気にかけて話しかけてくれるのが嬉しい。早速 6 人そろって記念撮影。これはいつも翌日、メールで山岳部全員に送付する。



2017.2.19 三峰山山頂にて

バカンス山岳部は、玉造駅前にあるピザ屋「バカンス食堂」に集まる山好きの若者たちが作った山の会だ。9 年前「隊長をやって。」と頼まれ、ほろ酔い気分で引き受けた。メンバーは息子たちと同年代の者ばかりだったが、4～5 年前から退職した私の友人なども加わり、現在 30 代から 60 代の 30 数名が在籍している。



創立当初、20 名も参加したこともあったが、ジュニアの多くが今、結婚、出産、育児、転職などの時期を迎え、例会に参加できる者は 6～8 名程度。部としては難しい時期を迎えている。特に、泊を伴う夏山は、参加困難な者が多い。そこで長い休みを取りにくいジュニアには、日数をできるだけ短くした夏山を。また時間に余裕があるシニアには、行程に時間をかけた夏山を用意している。今年は、7 月に白山、8 月に甲斐駒ヶ岳・仙丈岳へ。どちらも 2 泊 3 日の予定だ。

山は、登る者にいろんな感動を与えてくれる。その感動は、自分の身体機能や生活をさらに高めようとする心を養い、さらに高い峰をめざそうとする意欲へ転化する。その繰り返しで自分を高めていくのだ。

自然と文化科へ入ってから、带状疱疹、腰部脊柱管狭窄症等を患い、未だに左脚の痺れが取れず、岩場が続く高山をめざすのが難しくなってきた私だが、身体が動く間は、「お父さん」「おやじ」「隊長」として山登りを続け、経験の浅い彼らに、私が体験してきたことを同じように体験させ、山の魅力を伝えていきたいと思っている。

（書く機会を与えてくださった 2 班の皆様、広報の坪井さん、ありがとうございました。また、「自然とは何か」を教えてくださいました自然と文化科の児玉さんをはじめ皆様方、3 年間ご指導ありがとうございました。天気の良い金曜日には山を歩いていますので、お会いするかもしれません。その時は声をかけてください。）

台場クヌギとエドヒガンの移植

3班 遊上 眞一

この夏オープン予定のキセラ川西せせらぎ公園に、川西市黒川地区から地区を代表する樹木、台場クヌギとエドヒガンを移植して、公園のシンボルツリーにする計画がありますので、ウォッチングしてきました。



世界中を飛び回るプラントハンター西畠清順さん、今回の移植作業を監修。



移植する2年前に必要な最小限の太い根を残し、それ以外は切除し、細根を発生させる掘り取り（根回し）作業を行なう。



掘り取り後、肥料を含んだ真砂土で埋め戻す。根を切断したので吸水が不十分な樹皮は乾燥し、日焼けするのを防ぐために麻布で幹巻する。そして、支柱を立てて木を固定し、水鉢を造って、水を十分にやる。



木の根と土が固まりとなった台場クヌギの根鉢を、菰で包んで根巻きする。
重量 2.5 トン。



2 年前に掘り取りした時に、枝を切ったが新たに萌芽が 2m 伸びていた。



高さ：15m 重量：6 トンのエドヒガンを。工事中のキセラ川西せせらぎ公園へ移植。

1 班 大森 美子

2 班 高原 富佐子



丸山千枚田



孵化したてのアオウミガメ・小笠原父島



雛まつり

4班 猪狩 美枝子



俳句・川柳

3班 谷坂 修二

城崎にて

黙々と箸を動かす蟹の宿

蟹の殻積んで話の山ができ

蟹宿も温泉も有る同窓会

タマミズキ

冬山にバンと突き出るタマミズキ

タマミズキ眠る山にも赤々と

自然と文化だより
皆様のご協力により32号が発
行出来ました。有難うございま
した。(広報委員会)